

「いま、(千葉県警に)引きこまりました」

「4分の遅れ」

「松戸警察のようですよ」

「遅れは3分」

「消防署を過ぎました」

上空に、ヘリの音が近づいてく。

7月半ばの午後、黒い車列がまちはずれの工場にはいつてきた。

前衛車につづく車には、菊のご紋のナンバープレート。お召し車である。

千葉県松戸市の、ハリマ産業株式会社にて、天皇陛下の行幸があった。

当社は、昭和45年、現社長の久保敏行氏(66)が創業した。社長は姫路の出身、それで、ハリマである。

ふすまなどの建具をつくる会社で、社員は48人。その半分はパートの職員である。

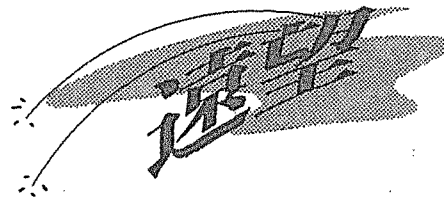
伝統を受けついでふすまは、職人が、経験と勘でつくってきた。しかし、職人が減る一方で、高層マンションなどは、一時に質の揃った製品が多く必要。

大久保社長は、職人とおなじ質で、速く、安くつくることがめざした。それには、工程を工夫して、機械に置きかえる必要があった。

ふすまの機械はないので

日本福祉大学客員教授

# 後藤 芳一



## 行幸中継 和の伝統を機械に

連載 67

その後、本物を求めて、天然素材と伝統技術を考えるようになった。

ただ、「職人の作業を機械にかえるには、自動化すれば済む」というわけではない。

ふすまの構造や作る手順は、巧みなしつけがある。

たときは、ふすまの強さは、紙でもついている。

ふすまは、芯材に下地紙と上紙をほり、4周に縁(ふすま)をつける。

芯材は細い木であり、軽いが柔らかい。そこに下地紙をはる。下地紙は、はる前に湿らせる。

はるのにより長くなる。

職人の手順には、こうした経験がしみこまれている。

単に自動化するだけでは、速くはなってもしつけ上りが、何かおかしい」といふこととなる。

職人のワザを機械化するのは、かかれたノウハウをみつけ、それを置きかえる作業でもある。

当社の工程と機械は、こうして、伝統と経験をカタチにしたものである。

「30年やって、ようやく、ちゃんと作れるようになった」と、大久保社長はいう。

A君は、それを使いながら、きれいに仕上げている。

陛下は、間近に寄ってA君の手元を見つめ、話しかけられた。

夢のなかを過ぎた80分。

この明けに近づく一日、前後でこの日だけ、青空だった。

7月15日(金) 15時 33分ハリマ産業御着、16時54分御発。随行は中川昭一経済産業大臣、望月晴文中小企業庁長官、高橋武秀関東経済産業局長、堂本暁子千葉県知事と川井敏久松戸市長。お出迎

えは、大久保社長、大久保節子取締役、大久保謙一常務取締役、大久保重人取締役、川井淑之同ほか。関係機関は宮内庁、皇宮警察本部、関東管区警察局長、経済産業省中小企業庁、同関東経済産業局、千葉県、同県警、松戸市、同市消防署ほか。御着が3分遅れたのは、沿道の日の丸のお迎えなどに徐行したため

機械や装置は、自分で考えた。当社にある機械の9割が、社長のオリジナルである。

もともと社長は、ものづくりが好きだった。理工系を志したものの、商学部にする。金融機関(信用金庫)に勤めた。

10年ほどで独立し、当社を興した。当時、開発されていた近代工法のふすま(タンボールふすま)を作りはじめた。

そのころ、ふすまの横幅90センチが、2センチほど伸びる。しつけへ伸びたままでは、乾かしてつてもその長さをとれない。下地紙は、伸びているときに、乾かしたあと、ふすまの中心部には、紙が縮もつと力をはたしている。ふすまが、ぴんと

張っているのは、その強さによる。職人が作るふすまは、下地紙をはるまでに、糊をたく作業をする。そのあとに紙が伸びて、

障子紙をはる作業である。担当するA君には、障害がある。同社では、大久保社長以下、A君を大切に育ててきた。糊をつけやすいように、A君が使う専用のローラを作った。

丸のお迎えなどに徐行したため